

カール・フローレンツの日本研究とその系譜 —異文化賞賛に潜む支配の構図

辻 朋季

1 はじめに——日本学者の日本賞賛

19世紀末から20世紀前半に活躍したドイツ人日本学者カール・フローレンツ (Karl Florenz, 1865-1939) は、ドイツ語圏で初めて日本学の正教授となり、文献学的な日本研究の基礎を打ち立てたことから、ドイツにおける「日本学科の父」⁽¹⁾と称されている。原典資料を読み込んで日本への知識を深め、数々の論文や著作を通して日本の歴史や文化を西洋に広く紹介したことで、彼はイギリス人日本研究者のアストン (William George Aston, 1841-1911) やチェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) らと並ぶヨーロッパ人日本研究者の先駆的存在とされている他、日本における国文学研究の近代化やドイツ文学研究の発展に寄与した人物としても有名である⁽²⁾。江戸時代に来日し、長崎の蘭学者の助力を得て、主に日本滞在中の見聞をもとに日本研究書を著したケンプファー (Engelbert Kämpfer, 1651-1716) やズイー

(1) 檜山正子「日独文化交流を支えた人々 第23回 東京帝国大学教授カール・フロレンツ 独文学科および日本学科の父」日独協会『かけ橋』*Die Brücke*, No. 571, (日独協会, 2003年), 4-5頁。

(2) フローレンツは1883年からライプツィヒ大学のフォン・デア・ガーベレンツ教授 (Georg von der Gabelentz 1840-1893) のもとで言語学とオリエント諸言語を専攻し、中国語や日本語も学んだ。また当時日本から留学中だった井上哲次郎 (1855-1944) と知り合いその知遇を得た。1885年にヴェーダに関する博士論文を提出し、その後はベルリン大学で言語学の研究を継続。1887年にベルリン大学に開校した語学学校「ベルリン東洋語学校」の第一期生として日本語を本格的に習得。さらに井上の勧めで、日本語と日本文化を専門的に研究すべく1888年4月に来日。翌1889年から帝国大学文科大学 (後の東京帝国大学文学部) の講師に、1891年からは独文学及び比較言語学 (博言学科) の教授に就任、以後1914年まで帝国大学で教鞭をとる。彼のもとから小宮豊隆、藤代禎助、登張信一郎、木村謹治など、後の日本のドイツ文学研究をリードする著名な学者を輩出した。彼自身はドイツ文学を講じる傍ら、専ら日本研究に打ち込み、1898年には日本書紀の注釈『日本の神話』*Japanische Mythologie*により、外国人として初めて帝国大学から文学博士号を授与された。その後も古典文学と古代史の研究に専念し、1906年には『日本文学史』を上梓。1914年にドイツに帰国し、ハンブルク植民地研究所に新設された日本学講座の正教授に就任、日本語の授業や日本文学などの講義を担当した。1925年には『古今和歌集辞典』を刊行、また同年から学外の民間人向けに日本紹介講座も開いて日本文化の紹介に努めた。1935年に退職、1939年に74歳で病没。フローレンツの生涯については、佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』(春秋社, 1995年), 197-253頁の「年譜および考証」及び254-285頁の「帰国後のフローレンツ」に詳しい。

ボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796 - 1866) とは異なり、フローレンツは記紀神話や万葉集、古今集など、日本語の原典を丹念に読み込み、西洋の文学研究の基準に照らしてこれらを価値付け、さらに文学作品の翻訳によって日本文学の妙味を西洋人にも伝えようと努力していた点が特徴的である。

彼の代表的著作である『日本文学史』*Die Geschichte der japanischen Litteratur* は、当時の西洋で流行した精神史として文学史を記述するスタイルを踏襲して、いわゆる「神代」から明治維新後までの各時代の文学の傾向と代表的作品について、時代思潮や政治的・社会的・文化的背景にも言及して詳述したものである。その冒頭で彼は、日本文化の優秀性を高く評価し賞賛している。

この東アジアの民族、欧米の国々以外で (欧米と——引用者注) 同等の地位を占めることにこれまで成功した唯一の民族が、驚くべき進歩を遂げていくのを、我々は観察してきた。ここ数十年來の国家間の交流を通して、以前にも増して日本人の生活習慣、能力や器用さに関する知見が深まったことで、我々は彼ら日本人が非常に才能に長けた民族であることを教えられた。彼らは、西洋の影響が浸透する以前から高度に発達した、より詳細な研究に値する文化を擁してきた民族である。特に日本の芸術や工芸品はヨーロッパの注目を、それぞれるか賞賛をも喚起した。そのため、日本の芸術は見方によってはヨーロッパの芸術を豊かにし、変革するほどに作用してきた、という事実をもはや看過しえないのである。(3)

フローレンツはさらに、日本民族の精神を体現する別の重要な要素である文学については、これと対照的にヨーロッパではほとんど知られていないとし、自らの日本文学史記述の重要性を強調している。こうした記述を、フローレンツ研究者の佐藤マサ子は「ヨーロッパの文献学者としての彼の日本文化の伝統に対する認識」を示すものと述べている(4)。

だが佐藤の研究の主眼は、フローレンツの日本研究が同時代の日本に与えた影響を考察することにあるため、日本文化に対するフローレンツの「認識」の具体的な中身やその前提となるスタンスについては論じられていない。確かに彼女が述べるように、フローレンツのフィロローギッシュな研究姿勢が「全く異なった思考基盤を伝統としていたわれわれの祖先」に「近代ヨーロッパ的思考方法の基礎となる認識基盤」をもたらす契機となった(5)、という点は間違いのないし、この点でのフ

(3) Florenz, Karl: *Die Geschichte der japanischen Litteratur*, 2. Ausgabe, Leipzig: C. F. Amelang's Verlag, 1909, S. VII. 日本語訳は筆者による。

(4) 佐藤『カール・フローレンツの日本研究』, 22頁。

(5) 佐藤『カール・フローレンツの日本研究』, 109頁。

ローレンツの功績は大きい。だが、彼がどのような態度で研究対象である日本と向き合っていたのか、といった問題提起を欠いた佐藤の研究は、フローレンツの研究姿勢が内包する問題点や、その研究姿勢がもたらした文化変容の背後に潜む権力関係といった点には考察が及んでいない。

佐藤も用いた「移植」という言葉からもわかるように、文化変容とは本来、優勢で支配的な勢力の技術や制度、思考様式や価値観が他の文化圏に浸透するなかで、劣勢に立たされた文化の側で生じるものである。そこでは、文化が相互に変容し合うよりもむしろ、いずれかの文化に一方的な変容を迫ることが多い。19世紀末の日独間の文化交流もまた（ジャポニズムなど、日本文化が西洋文化に対し作用した一面もあるものの）、彼我の国力の圧倒的な格差のもとで生じた日本によるドイツ文化の一方的な受容のプロセスであったと言え、事実それは日本の従来の思考様式に根本的な変革をもたらしている⁽⁶⁾。だとすれば、このドイツ優位の力学が、フローレンツの日本に対する認識のあり方に影響を与えていたことは十分に考えられる。

ここで前掲の引用を注意深く検証してみよう。確かに上記の引用を字義通りに解釈すれば、彼は日本文化を、西洋文化に対して影響力すら持ちうる高度なもの、注目のみならず賞賛 *Bewunderung* に値するものとポジティブに捉えていたと言える。しかし他方でそこには、文化を序列化して語ろうとする姿勢を読み取ることができ、西洋文化は自明の前提の如くその頂点に位置付けられている。なぜなら「より詳細な研究に値する文化」という表現は言い換えれば、非西洋の文化の多くは論じるに値しないと彼が考えていたことを図らずも証言しているからである。その意味で彼の日本賞賛は、西洋文化の価値の優位性を当然視することで初めて生じ得る余裕に支えられていたと言える。

このようなフローレンツの西洋中心主義的態度は、第一次世界大戦勃発後に端的な形で表面化することとなる。ハンブルク植民地研究所に新設された、ドイツ初の日本学正教授のポストに就いた直後の1914年10月30日、講演「ドイツと日本」において彼は、ドイツに宣戦布告した日本への怒りを顕にして、あからさまに日本を貶め罵倒する発言をしている。

われわれドイツ人は、この東アジアの国民と友好的に接しようという偽りのない気持ちの中で、日本人による誤解と猜疑心と嫌悪がかくも根深いものであることにあっけにとられて言葉も出ません。ましてや我々が日本人から感謝されているなどということを語りたくもありません。そんなものはもう姿かたちもなくなってしまったのですから。しかし私は、ドイツの言語や文学や文化を

(6) 西洋文献学の手法を後ろ盾に持つフローレンツが、日本研究において方法論的優位に立っていた点は佐藤も指摘している。佐藤『カール・フローレンツの日本研究』、153-154頁。

広めようと働いて25年間もの間奉仕してきたこの国に対する憤怒の情で煮えくりかえっているこの瞬間にあっても、またほとんど無駄になってしまった自らの生涯の仕事について心の底から振り返る時にも、私は今なお、自分が正しきドイツ人、つまり公明正大なドイツ人として、自らの信念、即ち日本人はもう少し人間的な性質を持っているという信念が全く失われてしまっていないのだと証明したいのです。(7)

自らをいわば「ドイツ文化の伝道者」と位置付けるフローレンツの意識下には、優れたドイツの文学と文化を後進国日本に教えてやったのだという自負が見え隠れしており、そこでは日本はドイツと対等の立場になく、ドイツ文化の優越性が前提となっている。だが、それでいて憎悪で一杯のはずの心の底に日本へのいくばくかの期待も込めており、徹頭徹尾日本批判に明け暮れているわけでもない。

このようにフローレンツは、日本を賞賛する一方で蔑視もするという、一見首尾一貫性に欠けるアンビヴァレントな態度を見せている。そのため彼の日本賞賛は、単に日本文化への見識の高さの証し、あるいは無邪気な驚嘆などと解釈して済ませることはできない。では彼の日本賞賛は何を意味しているのだろうか。

2 ポストコロニアル研究における他者表象

日本に対する賞賛という言葉もまた、広い意味での西洋による他者表象の一形式と捉えられるだろう。そこでこうした言説を分析するに当たり、これまで西洋による異文化表象のあり方を批判的に論じてきたポストコロニアル研究の成果や現状を把握しておきたい。

西洋人によるオリент表象の問題点を鋭く突いたエドワード・サイードの『オリエンタリズム』(8)が、言説レベル・表象レベルでの植民地主義批判の出発点になっていることは周知の通りである。西洋人のオリент観を、西洋人の願望の投影された心理表象であると捉えるサイードは、西洋がオリентを女性的・官能的・本能的で奇矯なものとして表象し、またこれらネガティブな性質をオリентに付与することで理性的・合理的で男性的という西洋の自己イメージを確立してきたと批判している。その結果、植民地主義批判の射程は、宗主国と植民地の政治的・経済的な支配と従属の関係を超えて、言説レベルへと拡大し、植民地主義を理論的に裏付け、支配を正当化し、差別や暴力的支配の内実を隠蔽するような言説のあり方が問題視されるようになった。

(7) Karl Florenz „Deutschland und Japan“, *Deutsche Vorträge Hamburgischer Professoren*, Nr. 6, Hamburg: Friederichsen, 1914, S. 18. 日本語訳は筆者による。

(8) エドワード・W・サイード (今沢紀子訳) 『オリエンタリズム』 (平凡社, 1993年)。

しかし今日では、サイドの議論は様々な立場から批判的に検討されているし、無批判にサイドを援用した植民地主義批判が抱える問題点も明らかになってきている。彼の議論が、オリентとオクシデントという単純な二元論に収斂しがちであることに加え、自らが批判した「オリентの一般化」と同じ手法で西洋の植民地主義を絶対悪として一般化して表象する、いわば「オクシデンタリズム」に彼自身が陥っているというのである⁽⁹⁾。またサイドを受容する際にも、オリエンタリズムを始めとする有力な理論を他の事象に安易に適用した表象レベルでの植民地主義の糾弾、いわば「悪者探し」に陥りやすいという問題も指摘されている⁽¹⁰⁾。たしかにそれでは議論が平板で画一的になるばかりか、「植民地主義」の概念が狭隘化し、他者表象に関するより抽象度の高い複雑なディスクールを、植民地主義批判の文脈に取り込めなくなってしまう危険性がある。

この点を踏まえ、今日の植民地主義研究は、言説レベルでの他者表象のあり方全般へとその射程を広げている。文化研究者ドーリス・バッハマン＝メーディックによれば、植民地主義批判の対象は、権力関係のもとでの他者言説の構築全般をめぐる問題に及んでいるという⁽¹¹⁾。つまり非西洋の差別に直結する他者表象や、支配や搾取の理論的正当化につながる似非科学的な言説だけを「植民地主義的」と捉えるのではなく、「植民地主義」の概念理解そのものを拡大しながら、他者表象の新たな批判的枠組みを構築していくことが重要になっている。

実際に、従来のポストコロニアル研究の枠内では、日本文化を賞賛する言説を批判的に分析するのは難しいだろう。というのも、ポストコロニアル研究は主として具体的・直接的・明示的に他者を劣等視する言説にばかり植民地主義的態度を読み込もうとしてきたため、日本文化に一定の価値を認めるドイツの日本学をポストコロニアルな視座で捉え切れないのである。仮に日本学者による日本蔑視の言説が多ければ、ポストコロニアル理論を援用した問題設定も容易だっただろうが、日本学

(9) 今野元は『オリエンタリズム』の問題点として以下の3点を挙げている。1) 非西欧に都合のよい言説の再生産の装置としてのオクシデンタリズム、2) 二元論のもとで見過ごされる「オリентとしてのドイツ」という位置付け、3) 「真実」ではなく「表象」を扱っており、学術的議論というよりむしろ政治的自己主張に陥っている点。今野元『マックス・ヴェーバー：ある西欧派ナショナリストの生涯』（東京大学出版会、2007年）、1-7頁。

(10) シェークスピアの『テンペスト』におけるキャリバン、ジェゼフ・コンラッドの『闇の奥』におけるクルツなどの登場人物は、文学における植民地主義的な他者表象の典型的な問題例といえる。なおポストコロニアル理論の濫用について、砂野幸稔は、クレオールの思想が文化の雑種性への肯定的評価ゆえに無批判に礼賛され、その結果かえってフランス海外県をとりまくネオコロニアルな現状が覆い隠されていると、クレオール受容の問題点を指摘している。砂野幸稔「セゼールを回収する権利は誰にあるのか?—ジェイムズ・クリフォードの『文化の窮状』とエメ・セゼールの文化論」『熊本県立大学文学部紀要』10巻1号(2006年)、13-26頁。

(11) Doris Bachmann-Medick, *Cultural Turns: Neuorientierungen in den Kulturwissenschaften*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag, 2. Auflage, 2006, S. 185.

者による異文化「賞賛」の言説は、植民地主義批判との関連では扱いきれない。そのため、初代駐日プロイセン領事マックス・フォン・ブランド (Max von Brandt, 1835-1920) による蝦夷地の植民地化計画などの個別具体的な史実は指摘できても、日本学者たちの一見好意的に見える日本観や研究姿勢にまでは考察が及ばなかったと言える⁽¹²⁾。日本学者による日本賞賛の言説は、往々にして字義通りに、彼らの日本への共感や愛着を証明するものと短絡的に結論付けられてしまい、ディスクール分析的に検証されてきていないのが現状である⁽¹³⁾。

しかし異文化を貶める言説が注意深く検証され、オリエント表象の多くが恣意的な構築物だと批判されている以上、異文化を褒める形での他者表象の言説もまた検証されてしかるべきだろう。第1節の引用で見た日本賞賛の言説のように、一見植民地主義とは縁遠い他者表象にも、歴史家オスターハメルが近代植民地主義の特徴として挙げた「自らの文化をより高次のものと看做す植民地支配者の信条」⁽¹⁴⁾に通底する性格が読み取れるのではないか。本論の狙いは、こうした問題意識に基づいてドイツの日本学者の日本賞賛発言を分析し、異文化賞賛に潜む支配の構図を明らかにしていくことである。その際にカール・フローレンツを主な分析対象とするものの、議論をフローレンツの個人史のレベルにとどめず、時代を超えて日本学に共通する言説構造の解明へと広げていきたい。そのためフローレンツの他に、第二次世界大戦前のドイツの日本学をリードした著名な学者であるヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert, 1880-1971) とヴァルター・ドナート (Walter Donat, 1898-1970) も取り上げ、彼らの発言や研究業績における日本賞賛の背後にあるものを検証してみたい。

3 独文学教授としてのフローレンツ

フローレンツの発言をさらに検証していきたい。前掲の講演「ドイツと日本」は、第一次大戦中の戦争協力の一環という、特殊な状況下で行われたものである⁽¹⁵⁾。

(12) フォン・ブランドの蝦夷地植民地化計画については Rolf-Harald Wippich, *Japan als Kolonie?: Max von Brandts Hokkaido-Projekt 1865/67*, Hamburg: Abera-Verlag, 1997. に詳しい。

(13) こうした評価がいかに問題であるかは、例えばブルーノ・タウトの日本論が、「日本の伝統的《精神》の復活」(ブルーノ・タウト (森備郎訳)『日本文化私観』(講談社, 1992年), 342頁の佐渡谷重信による解説) などともはやされ、日本文化の優秀性へのお墨付きとして受容されている経緯を見れば明らかだろう。西洋人による日本賞賛は、往々にして日本の保守派に好んで受容されて(本来検証困難なはずの)日本の文化的特異性・優位性を裏付ける役割を担う。またこうした受容は、西洋中心の価値基準の規範化を前提とし、これに依存することで成り立っており、日本文化に対する視点の相対化よりもむしろ西洋的価値観への従属を促すものである。

(14) Jürgen Osterhammel, *Kolonialismus: Geschichte, Formen, Folgen*, 4. Auflage, München: Beck, 2003, S. 21.

そのため、彼も戦時下の熱狂に抗いきれず、あるいは聴衆の期待を付度して、日本を殊更に貶める発言をしたのだとも解釈できるかもしれない。だが日本を見下すような彼の姿勢は、戦時下という特殊な状況に限られていたわけではない。講演「ドイツと日本」に先立つ1905年、シラー没後100年に際して東京のドイツ公使館で行われた「シルレル百年祭」における記念講演の場で、彼はこう発言しているのである。

文学上の修養の深い獨逸文学語学の専門の教師諸君の御集合の席上で、シルレルの詩作や歴史や哲學美學上の著作に就いて詳しくお話すると云ふことは僭上至極だ、野暮な仕方だと解釋せられましても申譯はございませぬ。併し夫れにも係はらず上述の通りに、殊に著名な詩作許りを撰んで敢て略評を試みました譯は、シルレルに対する合理的評論が踏み出してはならぬ境界が有ると考えます所から、出来るだけ簡単にこの境界線を指し示さうと云う積りからでいます。其訳は今日は實に残念ながら、批評と云ふ道具立を濫用し、身の程を知らぬ自惚根性よりして、シルレルに對して、不合理な評論を行って居る時代で有るからでいます。(16)

ここでは、日本研究のスペシャリストであるフローレンツが、ドイツ文学を専門とする日本人ゲルマニストらを前に、シラーに対する身の程知らずの批判を嗜めている。この、文字通り「僭上至極な」発言を彼がなしたのとはなぜだろうか。それには、彼がドイツ文化の優位性を意識した上で、自らをその担い手として、シラーを始めとするドイツ精神史の発展の延長上に位置付け、ドイツの精神文化の正当な継承者を自認していることが前提となる。ここにもやはり、ドイツ人という自らの立場を特権化する彼の意識が読み取れる。

フローレンツの独文学者としての経歴、即ち日本文学研究を専門とする彼が東京帝国大学独文学科の教授を20年以上務めていた、という事実は注目に値する。「日本における独文学科の父」という評価もこのことに起因している。だが、実のところ彼は積極的に独文学研究に関与していたわけではない。1895年11月の帝国文学会秋季大会において「エルテルに就て」の講演を、また1905年の「シルレル百年祭」に際して前述の講演を（日本人に向けて）行っているものの、彼がドイツ文学研究に

(15) 第一次大戦勃発後、ドイツの大学教授はこぞって戦争支持を表明し、戦争をドイツ文化の生き残りをかけた戦いだと評し、また英仏への敵対心も煽っていた。その様子は Klaus Böhme (Hrsg.), *Anrufe und Reden deutscher Professoren im Ersten Weltkrieg*, Stuttgart: Reclam, 1975. に詳しい。

(16) カール・フローレンツ (片山正雄訳) 「シルレル百年祭記念講演」帝國文學會『帝國文學』第17卷第7 (1905年), 15頁。

関する論文や著作を残したといった記録は日独どちらでも見つかっていない⁽¹⁷⁾。

もちろん、だからと言ってフローレンツが独文学科の教授として不適格であったわけではない。ドイツの大学の人文主義的教育のもと、彼がドイツ文学に関する広範な知識を持ち合わせていたことは間違いないし、1887年に設立された帝国大学独文学科において、ドイツ文学の知識や研究方法をまず基礎から「移植」せねばならないという脆弱な研究基盤のもとでは、専門分野でなくとも彼に十分仕事が務まったのだろう。だが、自らをドイツ精神、ひいてはヨーロッパ精神の担い手とみなす彼は、本来専門分野に属さないシラーに関して語り、日本の独文学者に教えを垂れる資格があると自認する一方で、日本のゲルマニストにはドイツ文学への批評を容認しようとせず、また本国のゲルマニスティークの枠を外れるような研究も認めがらなかった⁽¹⁸⁾。さらに自らの専門である日本研究に関しても、フローレンツは日本の国文学研究者らと方法論上、解釈上の数々の論争を引き起こしたが、そこでも彼は西洋の文学研究や文献学の理論にいわば教条的に固執して日本側の反論に耳を傾けようとはせず、対話や交流の余地を認めていない⁽¹⁹⁾。

このようにフローレンツは、自らが拠って立つ西洋の文献学的手法や文学理論の普遍妥当性を信じて疑わなかった。彼に対する「ドイツにおける日本学科の父、日本における独文学科の父」という評価が生まれたのは、彼が西洋の人文科学を揺るぎない拠り所にして日本に独文学研究を一方向的に「移植」とともに、日本研究という手つかず——西洋の学術的議論の対象になっていないという意味での——の研究分野を自らの手中に収めて「占有」していった結果に他ならない。

4 賞賛と蔑視の並存——日本表象の二面性

このようにフローレンツは、西洋の文献学者としての自らの日本における立場を特権化し、またドイツ文化の優位性を自認しながら、独文学科の教授を務めつつ、

(17) 日本人学生向けのドイツ語教科書『獨文階梯』は、独文学科の教授としてのフローレンツの唯一の業績と言える。だが彼はテキストの監修にしか携わっておらず、また同書の内容も、解説や設問が日本語である以外は特に日本人学習者に配慮しているとは言いがたい。Doitsu Gogaku Zasshi (Hrsg.), *Leitfaden für den ersten Unterricht im Deutschen zum Gebrauche für japanische Schulen*, durchgesehen von K. Florenz/ I. Omura, Tokyo: Doitsu Gogaku Zasshisha, 1902.

(18) 1910年、小野秀雄が独文科の卒業論文に社会科学的関心に基づいてマスドラマ論を扱ったことに対し、フローレンツは不機嫌だった(但し彼は論文の出来を「思ったよりよかった」とほめた)という。佐藤『カール・フローレンツの日本研究』, 244頁。

(19) 例えば彼は日本の俳句や川柳を西洋の叙情詩の形式に改変して独訳したため、「二行位にてなにとか工夫のつかざる者か」と反論した上田万年との間で激しい論争を繰り広げた(1895年)。その際も彼は、短句は西洋で文学的価値を持たないため、翻訳において短句形式の踏襲はできないと自らの立場を譲っていない。論争の経緯については、帝國文學會『帝國文學』, 1巻2号, 3号, 5号, 7号, 9号(1895年)を参照。

日本研究者としても活動していた。日本に対する賞賛が、このような、自己の文化的立場を高次のものと看做す信条を前提に成り立っていたと考えれば、日本を賞賛するが蔑視もするという、一見矛盾する日本表象が彼自身にとっては首尾一貫性を持てたことの説明がつくだろう。

日本に対する賞賛と蔑視が奇妙にも並存している例を、『日本文学史』の第4章「近代」の冒頭、日本の近代化についてのフローレンツの評価から読み取ってみたい。

もちろん、世界で最も優れた諸民族が何百年にわたってともに築き上げてきた文明という、すでに完成された結果を習得することは簡単この上ない。またこれまで既に文化的であった民族（日本民族——引用者注）が他の諸民族の物質的な成果と経験を上手に利用したとしても、それは何ら驚くに値しない業績であり、並外れた力を示すものでもない。しかしそれでも、日本人がそれらを取り入れるプロセスにおいて明らかになった彼らの以下の特質——活発な勤勉さ、困難にあっても目標を見失わない粘り強さ、彼らに馴染みのない状況や概念を理解できる知性、真の精神形成と情操の育成を希求する衝動——これらの特質が無条件に評価するに値するものである、ということは否定できない。⁽²⁰⁾

最も優れた諸民族とは、ヨーロッパの諸民族と同義だろうから、彼はドイツの優位性を損なわない形で日本の能力をも高く評価する、という論法で日本民族の特質なるものを列挙し、これを文字通り肯定的に評価 *anerkennen* している。ここでも、西洋文明の絶対的優位と、それを前提とした上での日本の近代化プロセスに対する賞賛という図式が顕著に見て取れる。いかに日本人の特質なるものを肯定的に評価しても、そのことが西洋文化の価値を損なうことはないのである。このように、フローレンツの日本表象においては、賞賛と蔑視とが矛盾を孕む形で混在していたというよりはむしろ、その時々議論のコンテクストに合致する形で、首尾一貫して並存していたことがわかる。

フローレンツの日本への賛美は、西洋の文化が非西洋の文化より勝っているという揺るぎない自負を前提としていた。日本はその枠内で表象される限りにおいて、個々の状況や文脈に応じて賞賛されることもあれば、蔑視され貶められることもあった。そしてその枠内において、日本を賞賛するという行為は、西洋人として日本と専門的にかかわる自己のアイデンティティを根拠づけるものではあっても、決して西洋的な枠組みを脱して異文化に没入する契機でもなければ、西洋中心的な思考に疑問を投げかける契機でもなかった。

(20) Florenz: *Die Geschichte der japanischen Litteratur*, S. 612-613. 日本語訳は筆者による。

もっとも本論の主旨はフローレンツ個人の非を糾弾することではない。後世の視点から、彼は日本での研究を通してヨーロッパでは得られない視点や着想を得て自らの思考様式を相対化しえたはずだ、などと非難することが適切とは思えないのである。むしろこれは彼に特異な態度と言うより、西洋近代の知——制度、理論、方法論、認識論など全般において——をめぐるドイツの圧倒的な優位から生じた態度であったと言える。フローレンツが来日した時、彼の眼前にはジャンルも豊富で歴史も長い日本文学という巨大な研究分野が、未だ西洋人によって十分に研究されないまま横たわっていた。体系立った日本文学史すらまともに執筆されていない状況を目の当たりにした時、彼の知的な欲求が、(西洋の学問を基準と捉えた時の)ドイツの方法論的優位と結びついて、いわば日本に関する「知の支配」に駆り立てたのだと言える。この知的な欲求と方法論的優位との結びつきの中で、時には知的好奇心が刺激されて日本を賞賛し、時には西洋中心的な視点のもとで蔑視に転じるという、日本への二面的な表象が、おそらくフローレンツ自身も意識しないうちになされていったのではないだろうか。

5 グンデルトの「日本心酔」の再検討

では、この日本表象における「賞賛と蔑視の並存」という図式は、フローレンツに特有のものなのか。この点に関して次に、フローレンツがハンブルクに打ち立てた文献学的な日本学を継承したとされるヴィルヘルム・グンデルトの言説に注目していきたい。

グンデルトには、能楽と神道をはじめとする宗教、文学、芸術研究での多数の業績があり、また日本文化に心酔し深い共感を寄せていた日本愛好家という側面が評価される一方、ナチズムとの深い関わりが問題視されており、日独枢軸という政治的状况をうまく利用して大学における出世コースをひた走った打算的な日本学者とも評されている⁽²¹⁾。ただ彼の日本学に対する研究姿勢が、フローレンツの文献学

(21) グンデルトはテュービンゲン大学とハレ大学で神学と哲学を専攻した後、プロテスタントの牧師として1910年に来日。内村鑑三らとともに布教に取り組んだ。1910年から15年まで、伝道のために新潟市近郊の村松（現在の五泉市の一部）に住み、ここで日本の庶民の生活に通暁する機会を得た。その後熊本高校でドイツ語教師を務めたが、1920年から2年間の休暇帰国中にハンブルク大学日文学科でフローレンツに師事、1922年に水戸高校のドイツ語教師として赴任した後も、日本の宗教や芸術、特に能楽への興味を深めた。1925年に博士論文『能における神道』をハンブルク大学に提出して学位を取得、1927年には東京に設立された日独文化会館のドイツ側理事に就任、また1929年発行の『文学研究ハンドブック』中の「日本文学」の項目を執筆している。フローレンツの退官後の翌1936年にはハンブルク大学日本学教授に就任、1937年には文学部長、1939年から42年間はハンブルク大学総長も務めた。第二次大戦後はイギリス占領軍により公職を追われ、晩年はノイウルムに居を構えて中国宋代の仏教経典『碧眼録』の独訳に従事し、1971年に死去している。グンデルトの生涯については Kanokogi Toshinori (Hrsg.), *Zum 100. Geburtstag Wilhelm Gunderts. Gedenkschrift*

的アプローチを踏襲していたという傾向は読み取れる。特に彼の能と神道の研究は、能の謡曲をテキストとして分析対象にしている。フローレンツが『日本文学史』において、単なる作家と作品の羅列のみならず、政治史的・文化史的背景にも言及し、また随所で代表的な文学作品の一部を独訳したように、グンデルトも能楽をめぐる芸術的・宗教的・文学的側面に注目し、謡曲の独訳も積極的に行なっている。フローレンツが取り組んだ、能楽の成り立ちや特徴、能に反映された日本人の宗教観などのテーマをさらに掘り下げたという意味でも、グンデルトがフローレンツの文献学的日本学を受け継いでいたことがわかる。

とはいえ、客観的と言われるフローレンツの日本観に比べて、グンデルトには日本文化をエキゾチックなものとして捉えたり、日本文化に特殊性を読み込んで殊更に美化したりする傾向が強い。そしてこうしたフローレンツとのスタンスの違いは従来、グンデルトの日本への「愛着」の証しとして肯定的に解釈されてきた。それを示す好例が、もともと宣教を目的として来日した彼が既に訪日直後、従来の布教活動のあり方に疑問をもち「この種の布教には不当な優越感が存在している」ことを悟って新潟への移住を決め、そこで「日本人と共に全く日本風に生活し、田畑で共に働くことを恥じず、その勤勉で謙虚な助力によって、非常な信頼と後々まで残る尊敬をかちえた」という逸話である⁽²²⁾。周知の通り、キリスト教の布教活動は植民地化の先兵の役割も果たしていたが、一見グンデルトはこのことを自覚して自己の立場を相対化し、それどころかミイラ取りがミイラになる形で日本文化に感化されたかに見える。

こうした日本最良の姿勢は、彼のキャリアの障害ともなりかねないものだった。実はフローレンツの後任の最有力候補に挙がっていたのは、ベルリンの日本研究所のドイツ側理事マルティン・ラミング (Martin Ramming, 1899–1988) であった。フローレンツの長年の同僚で中国学者のオットー・フランケ (Otto Franke, 1863–1946) は、ラミングを推薦する理由として、グンデルトが「あまりにも日本的すぎる」点、また「日本の本質 Wesen にあまりにも魅了されすぎて、批判的態度や歴史的な視点を失っている」点を挙げている⁽²³⁾。つまりグンデルトは批判精神を損なうほどに日本に愛着を抱いており、ナチズムのもとでの大学教員として不適切だと見られていたと言える⁽²⁴⁾。実際に、彼の主要著作である「日本文学」の序章、「日本文学

『ウィルヘルム・グンデルト生誕百年記念特集』, Sonderausgabe von Kishitsu-Kiho, 1980. に詳しい。

(22) ディートリッヒ・ゼッケル (鹿子木敏範訳) 「ウィルヘルム・グンデルト回想」, Kanokogi, Ebenda, S. 15–17.

(23) Herbert Worm, „Japanologie im Nationalsozialismus. Ein Zwischenbericht“, Gerhard Krebs/ Bernd Martin (Hrsg.), *Formierung und Fall der Achse Berlin – Tôkyô*, München: Iudicium, 1994, S. 166.

の独自性」では、彼の日本文化への心酔ぶりが伝わってくる。彼は日本語の語感について次のように説明している。

Blume に対する最も日本的な表現は”はな”, Farbe に対する”いろ”, Kirsche に対する”さくら”, Frühling と”はる”, ”あき” と Herbst というふう
に比べてみると、これらの日本語はたとえようもなく純粹、正確であり、目に
写る光景がそのまま響きとなったのかと思うほど、対象があるがままの息吹と
なっている。それは生育過程の”花”ではなく、自然現象の”秋”でもない。そ
んな内的な概念も隠れた意味もなく、ほんとうに響きとなった色なのである。
そこには幼いあどけなさ、浮きたつ楽しさ、かすかな憂いのといきがある。そ
の表現のはかなさにこそ諸行無常の感じがほの見えている。われわれヨーロ
ッパ人はごく一面的に、ひたすら存在や生成や行為へ目を向ける性質があるため
に、その対象の向かう側にあるもの、ほろびゆくもの、束の間のもの、消えゆ
くものの彼方にある、あらゆる美の可能性を見失ってしまうおそれがある。(25)

この個所は、『ウィルヘルム・グンデルト生誕百年記念特集』の中で、彼の日本
文化への共感の深さを示す例として引用されている。確かにヨーロッパ的なものの
欠点を指摘してまで日本語の語感を賛美するグンデルトの態度には、日本文化への
深い洞察力と共感が込められているようにも見える。

しかし、日本語の語感の背後に日本人の特質まで読み込もうとする彼の本質主義
的な議論は、日本語の語彙が「たとえようもなく純粹で正確」である理由を根拠付
けることはできない。ソシュールが指摘したように、シニフィアンとシニフィエの
間にはいかなる自然的な絆もなく、両者の関係は恣意的なものにすぎないから、日
本語の語感に美的なものが宿っているという彼の主張は、そうであってほしいとい
う彼の先入見や願望の投影でしかない(26)。つまりグンデルトは、これこそ日本の
本質だと勝手に読み込んだものに魅了されていたにすぎない。よって、上記の引用
をもって彼が日本文化のよき理解者であったと捉えるのは早計であろう。また日本
文化の本質なるものを恣意的に読み取ろうとする彼の態度は、単なる日本文化への

(24) にもかかわらず最終的にグンデルトが選ばれた理由は、彼がナチ党員でラミングが党員
でなかったこと、また対日政策に影響力のあった元駐日ドイツ大使ヴィルヘルム・ゾルフ
(Wilhelm Solf, 1862 - 1936) がグンデルトを支持したことによるという。Worm: Ebenda, S.
165-172.

(25) Wilhelm Gundert, „Die japanische Literatur“, Oskar Walzel (Hrsg.), *Handbuch der Lit-
eraturwissenschaft*, Wildpark-Potsdam: Akademische Verlags-Gesellschaft Athenaion, 1929,
S. 5. 日本語訳は鹿子木敏範「ウィルヘルム・グンデルトの生涯と業績」, Kanokogi (Hrsg.),
Zum 100. Geburtstag Wilhelm Gunderts, S. 6-7.

(26) 丸山圭三郎『ソシュールを読む』(岩波書店, 1983年), 184-202頁; 加賀野井秀一『ソ
シュール』(講談社, 2004年), 98-111頁。

没入や心酔とは解釈できない⁽²⁷⁾。そのためグンデルトの日本賞賛の言説は、より注意深い分析を必要とする。

6 日本学とナチズム——賞賛と蔑視から生まれる調和

グンデルトはフローレンツの後任としてハンブルク大学日本学教授に就任すると、フランケの懸念とは裏腹に、すぐさま自らの日本観やドイツの日本学に対するビジョンを示し、日本学をナチスドイツのイデオロギーに奉仕させることを表明した。1936年6月4日、「日本の重要性和ドイツの日本学研究の課題」⁽²⁸⁾と題した就任記念講義で彼は、日本語の原典を読み込む文献学的日本学の踏襲を訴えつつ、その成果が今日持っている政治的・経済的な意味を考察する必要があると述べている。日本学と現代との関わりを重視した彼は、第三帝国における日本の意味づけや、日本学がドイツ民族に向けて称揚すべき日本文化の価値について考察する一方、「芸術のための芸術」さながら「日本学のための日本学」といった自己目的化した日本研究を戒めている⁽²⁹⁾。

もちろん彼が日本学と現代とのつながりを重視した背景には、ライバルであるラミングが同時代の日本の政治や経済に精通していた点を念頭に置いていた可能性もあるし、懐古趣味的な古典注釈研究ではナチズムの要求に応えられないと踏んだ一面もあるだろう。しかし彼は他方で、日本学の研究基盤については従来の姿勢——日本語習得と、日本語の原典を地道に読み込む文献学的アプローチ——を変更してはならないとも主張し、フローレンツの研究姿勢の継承にも努めている⁽³⁰⁾。

このことからグンデルトは単に日本に心酔していたわけでも、またただナチズムに盲従して権力に媚びていたわけでもなかったことがわかる。次の発言からは、むしろ彼が日本ないし日本学に対する自らの考えとナチズムのイデオロギーとの間で、きわどい立場を取らざるを得なかった様子が窺い知れる。

(27) 彼はまた、フローレンツの定年を見越して既に1934年末からドイツ外務省に働きかけを行い、ハンブルクのポストを虎視眈々と狙っていた。こうした事実から、ハンブルク大学総長にまで上り詰めたグンデルトの権力志向の一端が垣間見られる。Worm: „Japanologie im Nationalsozialismus“, S. 165–166.

(28) Wilhelm Gundert, „Die Bedeutung Japans und die Aufgabe der deutschen japanologischen Arbeit“, Deutsche Morgenländische Gesellschaft (Hrsg.), *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. 90, 1936, S. 262.

(29) Ebenda, S. 249.

(30) 例えばグンデルトは「現代の日本に関する問いに答えるには、日本の過去について知ることが重要で、そのためには日本語の習得が不可欠である。西洋語で書かれた文献を当てにすることはならない。日本に滞在した外国人が、日本語ができないにもかかわらず書いた見聞録には歪曲、事実誤認が散見される。」と、文献学的な日本研究の重要性を説いている。Ebenda, S. 259.

日本の学問はここ30年の間に我々ドイツの研究基盤を非常にうまく取り入れ、それにより彼らは自ら持っている計り知れないほど多くの素材に、比類ないほど簡単にアクセスすることができるものですから、日本の学問は日本学の領域で常に先を行くことになるでしょうし、日本人でない者がこのリードに追いつくことはわずかな例外をのぞけばほとんど不可能でしょう。しかし日本学の資料をまとめて一つの民族の像を描き、ドイツ民族が理解できるようにその像を解釈し、我々の視点からそれらを評価すること、これは我々にしかなしえない課題であり、これは我々にのみ有益であるのみならず、日本においても注目を浴び、ドイツの名声を高めることとなるでしょう。(31)

皮肉にも日本の学問の近代化にフローレンツを始めとするドイツ人学者が貢献した結果、日本の日本研究に近代的方法論が確立し、ドイツの日本学を凌駕してしまったのだが、ここでグンデルトは日本の学問の近代化に貢献したドイツの高い学術水準に触れて独一日の「師弟関係」を際立たせている。また彼は、日本民族を統一体として捉えてドイツ人に提示するというドイツの日本学の使命を提示する。民族としての特質を探ることにおいてはドイツの日本学の右に出る者はおらず、その成果は日本にもフィードバックされてドイツの名声を高めるといっているのである。このように彼は日本を褒めることで同盟国日本の体面を繕い、日本学の重要性も担保しつつ、ドイツの優位性も前面に押し出している。その結果彼の議論は、全体的に見ればナチズムのイデオロギーとも日独友好の建て前とも調和していることがわかる。

グンデルトがどの程度西洋の学問の優位を自認し、またナチズムのイデオロギーに迎合していたかをさらに検証してみたい。1942年秋にベルリンで開催された「ベルリン東洋学会議」における講演「日本における天皇制の発展と意義」(32)からは、真理への欲求を基調とするヨーロッパの学問の優位性に彼がいかに固執していたかが明白に読み取れる。

統一的な世界像を情熱的なまでに求める衝動は、今ではヨーロッパの精神史の特徴となっています。すでに古代ヘレニズムの哲学者たち、つまりソクラテスやプラトン、アリストテレスが、またアレキサンドリアのオリゲネスからトマス・アキナスに至る偉大な教父が、そして言うまでもないことですが近代の偉大な発明家たちが、この衝動を具現化してきました。真理への情熱——彼らがそのために闘うことも辞さなかったところのこの情熱——これこそヨーロッ

(31) Ebenda, S. 262. 日本語訳は筆者による。

(32) Wilhelm Gundert, „Die Entwicklung und Bedeutung des Tenno-Gedankens in Japan“, Hans Heinrich Schaede (Hrsg.), *Der Orient in deutscher Forschung. Vorträge der Berliner Orientalistentagung, Herbst 1942*, 1944, S. 137–157.

パの名誉とするものであり、またヨーロッパの使命でもあり、運命でもあったのです。ヨーロッパの外では、これとは異なる主題が重視されています。それは対立するものを統一と調和と和解へと向けようという衝動です。日本人は、穏やかな気性や自然との深い結びつき、専ら現実的な政治に向けられる感覚、折衷主義的な運動、様々な文化的要素を平和裏に併置させてそれらが互いに調和しているさまを眺める能力を備えているだけになおのこと、ヨーロッパに備わっているような、世界観をめぐる激しい闘争などは日本には期待すべくもないのです。(33)

引用箇所は、戦争による政権交代を経験したヨーロッパの王朝と、「万世一系」とされる天皇制とを対比するための前置きとなっている。権力が移り変わるヨーロッパの王政に比べ、日本民族の求心力として断絶なく続いてきた（とされる）日本の天皇制を賛美するための導入という位置付けである。ここでは、ヨーロッパ史における権力闘争との関連で、真理のために闘争も辞さないヨーロッパの学問の伝統と連続性が称揚されている。日本には真理をがむしゃらに追究するパイタリティーがなく、良くも悪しくも調和に落ち着くきらいがあると言わんばかりである。だが講演全体を通して見れば、日本の天皇制がポジティブに評価され、一視同仁の皇道のもと、日本民族は強固に結束し、必ずや世界大戦を勝利に導くだろうと述べられている(34)。

このようにグンデルトにおいても、日本文化は、賞賛と蔑視が表裏一体となる形で表象されている。そしてここでも、西洋の精神文化が他に勝るという考えが当然の前提として貫かれた上で、日本民族の特性なるものが賞賛されている。自らの文化を優位に置く自己理解のもとで日本を賞賛する限りにおいて、グンデルトは決して日本に魅了されて批判精神を失うことなく、権力の求めや状況に応じて様々な日本像を描くことができたと言える。そしてこの賞賛と蔑視という眼差しの並存のもとでは、日本研究の意義とナチズムの理念とが奇妙に折り合っている。自己の文化の優位性を前提に日本を賞賛し蔑視もすることで、一方で自民族中心的なナチズムのイデオロギー、他方で日独伊三国同盟という、本来調和しえない要素を抱えた特殊な状況に適した言説を生み出すことが可能だったのである。

7 ドナートの日本「賞賛」

グンデルトは、日本に関する高い専門的知識を駆使しながら、日独の同盟関係の強化に都合の良い言説、例えば「ゲルマン民族と日本民族は外来の文化を吸収して

(33) Ebenda, S. 141. 日本語訳は筆者による。

(34) Ebenda, S. 151.

改良しこれを自家薬籠中のものとして民族の血肉にすることに長けている」などの議論を展開し、ナチズムのイデオロギーに日本学を奉仕させていった⁽³⁵⁾。そして日本学は、彼の弟子に当たるヴァルター・ドナートのもとで、文献学的アプローチから離れてナチスドイツのイデオロギーを体現するような言説の構築に邁進していくことになる。

ドナートのナチズムとの深い関わりは、すでに幾人かの論者によって立証されており、彼は「国民社会主義の文化政策という邪道を突き進み、日本学の専門の課題から遠ざかりすぎた」⁽³⁶⁾とか「まず日本で、戦時中にはベルリンで、国家政策上の枢軸を文化政策上で粉飾することにたゆまぬ努力を払った人物」⁽³⁷⁾と評されている⁽³⁸⁾。しかし、ナチズムとのつながりを容易に指摘できるゆえに、ドナートについての研究はあまりなされておらず、その言説の中身は実は十分に吟味されているとは言い難い。

ナチズム体制下の日本学における唯一の教授資格論文とされるドナートの『日本の古典文献における英雄概念』*Der Heldenbegriff im Schrifttum der älteren japanischen Geschichte*には、日本の軍事史ともいうべき側面があり、兵士や武士をめぐる制度や彼らが歴史上果たした役割などが紹介されている。その上で、特に『平家物語』や『太平記』など、日本の軍記物に描かれた兵士や武士の英雄像が分析されている。フローレンツやグンデルトの研究とは違って、ここには日本語の一次文献を丹念に読み込んだ形跡がなく、翻訳なども行われていない。二次文献も多くは西洋語の文献に拠っており、随所にフローレンツからの引用が見られ、フローレンツの確立した文献学的アプローチはここで放棄されている。だが他方で、日本

(35) Wilhelm Gundert, „Fremdvölkisches Kulturgut und Eigenleistung in Deutschland und Japan“, Walter Donat (Hrsg.), *Das Reich und Japan, gesammelte Beiträge*, Berlin: Junker und Dünnhaupt, 1943, S. 15-43.

(36) ヘルベルト・ヴォルム「ナチスの時代の日本学研究」ベルリン日独センター『ベルリン日独センター報告集』, 12号, (1994年), 61頁。

(37) エーバーハルト・フリーゼ「30年代と40年代の文化事業に関する考証」ベルリン日独センター『ベルリン日独センター報告集』, 12号, (1994年), 57頁。

(38) ドナートは1919年から1924年にベルリン大学でドイツ文学を専攻し、『ティークにおける風景とその歴史的前提』で博士号を取得したが、副専攻は哲学と美術史で、在学中に日本に興味を持っていた形跡はない。その後1925年から1935年まで、広島高校でドイツ語とドイツ文化を教える傍ら、日本語や日本の文化に関する知識を得て日本学に接近した。1936年にグンデルトがハンブルク大学日本学教授に就任すると、グンデルトのもとに教授資格論文『日本の古典文献における英雄概念』を提出、翌1937年には東京の日独文化協会の理事(かつてのグンデルトのポスト)に就任し、その後は第三帝国のイデオロギーを日本に広めるために腐心した。1941年、第二次大戦の影響により一時帰国先のドイツから日本に戻れなくなると、ハンブルク大学の私講師に就任、1943年にはSSがベルリンのダーレムに開設した東アジア研究所の所長に就任している。彼は最も積極的にナチズムと関わった日本学者として戦後に公職を追われ、エアランゲン大学の非常勤講師を務めた他は復帰の道を閉ざされた。戦後の業績には川端康成や谷崎潤一郎の作品のドイツ語訳が挙げられる。

に対する賞賛と蔑視の並存という点では、フローレンツやグンデルトとの間に共通点を見出すこともできそうだ。彼の論文の冒頭を紹介しよう。

ある民族の文献において、兵士の姿や英雄的な心情がこれほどに大きな位置を占めているという例は、日本民族のそれをおいて他にほとんど見当たらない。確かに日本文学には、ゲルマン的・ドイツ的な、あるいはロマンス語の中世叙事詩のように、最も古い過去の素材を多種多様なジャンルの中で詩的に加工して仕上げたような英雄叙事詩が欠けている。しかし日本における文字文化の始まりとは、とりもなおさず戦争に関する出来事を著述するということだった。(39)

日本文学における英雄的な心情の重要性について褒めるドナートだが、彼にとってはドイツ中世の英雄叙事詩のほうがより優れているとされている。ここでも日本民族への賞賛は、ドイツをそれ以上の位置に置くことで初めて可能になっていると言えよう。

同様に、ドナート自身が編集に携わって1943年に出版された講演集、『第三帝国と日本』*Das Reich und Japan*の序言でも、彼は日本とドイツの民族的特質の共通点とその優秀性について語っているのだが、その前段では明治以降のドイツ文化の「移植」がいかに日本を席卷していたかを強調するべくこう述べている。

ドイツ語は、ほとんど全ての上級の学校において講義科目となった、大学においてはこれがドイツの学問に接するための入り口となっている。ドイツの学問は（日本のいくつかの分野においては、すぐさま圧倒的な地位を占めるに至ったのである。例えば医学や哲学などは最も強くドイツの影響を受けて成立した分野である。それ以来、日本の上級の教育・研究機関ではドイツ語が確固とした地位を占めている。ドイツの学問の影響がこれほど名声を博している国は、世界の他の大国の中にはほとんどない。(40)

ドナートにおける日本賞賛の背後にも、ドイツ語とドイツ文化に常に優位性を認めようとする自文化中心的な信条が露見している。しかもこれまで見てきたとおり、日本においてドイツ語が、世界で他に例を見ないほど確固とした地位を占めるに至った背景には、25年間にわたるフローレンツの帝国大学での活動があり、そのフローレンツも自らをドイツ文化の伝道者と位置付けていたのである。自らの文化的

(39) Walter Donat, *Der Heldenbegriff im Schrifttum der älteren japanischen Geschichte*, Leipzig: Harrassowitz, 1938, S. A1. 日本語訳は筆者による。

(40) Walter Donat, „Deutschland und Japan: Eine Einführung“, Donat (Hrsg.), *Das Reich und Japan*, S. 6. 日本語訳は筆者による。

な立場を特権化し、日本を褒めているようで対等なパートナーとは看做さない、という点で3人の日本学者の姿勢には、一定の共通点が認められるだろう。

8 おわりに——異文化賞賛のポテンシャル

日本という、ナチズムのイデオロギーのもとでは対等に扱えないはずの研究対象が、なぜ賞賛すら伴って語られえたのか。本論で見てきた自らの文化的優位のもとでの賞賛と蔑視の並存という構図は、この問いに対する一つの解答となるだろう。フローレンツら3人の言説は、個々の発言内容の整合性はともかくとして、少なくとも個々のディスクールの内部においては彼ら個人の信条とも、また日本学の学問的な知識とも、さらにはナチズムのイデオロギーや日独枢軸関係とも大きく矛盾することなく、調和していた。こうした、一見アンビヴァレントな価値判断が矛盾なく並存している点に、他者を自在に表象できる日本学の強み、政治的なポテンシャルの大きさをうかがい知ることができよう。

だが問題は、ナチズムと日本学という個別のテーマに限定されるものではない。むしろ彼らの日本賞賛言説を、異文化交流における(オリエンタリズムとは異なった形で)他者表象の一形式として捉えることが重要ではないだろうか。賞賛がその背後に自らの文化的優位への確信を伴っている時、それは蔑視とも容易に並存しうることを、本論ではドイツの日本学者を例に見てきた。これは言い換えれば、異文化への蔑視が、賞賛という屈折した形をとって表れていることも意味するだろう。しかも日本を褒めているつもり of 彼ら自身は、賞賛に潜む蔑視の構図を意識していなかったと思われるだけに一層、彼らによる日本表象は、非西洋の他者を一方的に貶めながら植民地の侵略や支配に直接関わった学問が行なった他者表象に比べて、より巧妙で複雑なものであると言える。まさにそれゆえに、今後の文化研究においては、異文化を褒める言説に対しても常に慎重な姿勢で臨むことが求められる。つまり賞賛を字義通りに受け取ることなく、その背後に潜む蔑視の態度を注意深く検証していくこと。こうした点を異文化交流論における共通認識としてゆくことが必要なのである。